

KM Report

Knowledge
Management
Society of
Japan

VOL. 1

1998 MAY



CONTENTS

- 就任のご挨拶
会長／評議員会議長
- 設立趣意書
- セミナーレポート
- KM関連図書のご案内
- 役員
- インフォメーション

就任のご挨拶



日本ナレッジ・マネジメント学会 会長 奈良 久彌

ただいまご紹介にあずかりました奈良でございます。

この度、皆様のご推挙によりまして日本ナレッジマネジメント学会の会長という大任を承ることになりました。全力をあげて取り組んでいきたいと考えておりますのでよろしくお願ひしたいと思います。また、この会が発足するまで理事長にご就任なられました森田様はじめ関係者の大変なご努力にたいしまして、厚くお礼申し上げます。

評議員会議長には、亀井止夫様にご就任いただいたわけですが、ご承知のように亀井様は日本を代表する財界のトップであり、私も社会経済生産性本部の理事と致しまして亀井理事長のもとで働かせていただいています。亀井様のご就任によりまして、この会のステイタスもかたまり、私どもも大変光栄に存じているわけでございます。

私からも亀井様に厚く御礼を申し上げたいと思います。

ご承知のように、21世紀もあと2年で終わりとなり、昨今は世紀末現象ということで色々な問題が起きています。この21世紀は機械文明の時代だったと思います。

その結果、大量生産、大量消費の経済となり色々な意味で歪みが出ました。企業経営の面から見ましても、人・物・金から成り立っていますが、最近人は人を忘れて物と金を承視したことが、バブルを招いた大きな原因であったと考えています。やはり人が大事だということで、この学会もここに焦点を当てているわけです。

人についての力は二種類あり、ひとつは体力であり、先の長野オリンピックでも鍛えられた体と

いうものがいかに美しいかを感じました。もう一つは知力という頭脳の力です。

先般のイラクの問題も、米国が軍事を使うところまで追いつめられましたが、アナン事務総長の大変な努力により平和的解決の方向に向き始めました。これはアナン事務総長の知力のお陰だと思います。その意味でこの学会は人の持っている知力について更に深く研究して行こうということになります。

ご承知のように、シュンペーターが創造的破壊という言葉を使って、人間は壁にあたると創造をして過去を破壊しながら新しいものを築いて行き宗教革命、農業革命、産業革命などおおよそ百年ごとに人間の知恵でこれを解決してきました。

現在は機械文明の時代ではありますが、21世紀に向かって情報化、高齢化など色々問題があると思います。ここでシュンペーターが言うように新しいものを創造しながらこれに対処することが非常に大事で、当学会が果たすべき役割は非常に重要であると存じます。

幸い、今日お集まりの皆様は各界を代表する方々ばかりで、ご賛同いただいた企業のトップのご理解もあり、皆様と共にこの学会の兆展のために尽くしていきたいと考えております。同時にこの分野で優れた業績を上げ方には学会賞を差し上げることも考えております。皆様方と共に、新しい良い時代を迎えられるように努力致してまいりますので、何卒ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

今日はどうもありがとうございました。

(平成10年2月25日 学会発会式挨拶より)



日本ナレッジ・マネジメント学会 評議員会議長 亀井 正夫

私はこの程日本ナレッジ・マネジメント学会(以下日本KM学会)評議員会議長に就任致しました亀井正夫でございます。

私は別途、社会経済生産性本部にも関係し、我国における企業経営の品質向上について努めているところでございます。企業経営の品質につきましては、一昨年日本経営品質賞を創りました。第一回はNEC半導体事業グループが、第二回は朝日ビール及び千葉夷隅ゴルフクラブの2社が受賞致しました。いささかでも日本の企業経営の品質向上に寄与できたと信じております。日本企業の経営はサプライサイドからデマンドサイドに、プロダクトアウトからプロダクトインに急速に変わっていくものと考えられます。

企業を取り巻く社会環境の変化のスピードは、我々が考えている以上のものがあります。経営品質について、例えばアメリカはすでにマルコム・ボルドリッチ賞があり、その賞の表彰会場はホワイトハウスで大統領が授与するというように非常に権威があります。

昨今におけるアメリカ企業の元気さは、大変なものであります。何がその原動力になっ

ているかと言えば、革新的経営に対する飽くなきチャレンジだと思います。

このチャレンジ精神がアメリカ企業のバイタリティの基礎・上台になっているのではないのでしょうか。革新の経営を創り出すことは言うべくしてなかなか難しいことであります。会社で持つ全ての資源を最大限に活用して、の持っている力をフルに活用する必要が でしょう。会社の持っている力・資源の一番重要なものは、人の力つまりナレッジです。

このナレッジをいかに「手にマネージするかが企業のをより力強く発揮させるパワーになります。今同そのような意味で日本KM学会で会員同士の研究発表を通じ、日本の経営品質向上に繋がることは、私としても大いに期待しているところであります。

また、評議員会でその年度の優秀な研究を選考し学会に推薦することになっています。

どうか、この学会から良い研究が発表され11本の企業経営の1、品質向上に資すること期待し、私の挨拶とさせていただきます。

(平成10年2月25日 学会発会式挨拶より)



日本ナレッジ・マネジメント学会 設立趣意書

変化に富んだ20世紀も終わりに近づき、21世紀が目の前に迫ってきている。21世紀がどのような世紀になるかは予測できないが、20世紀以上に波乱と変化の世紀になるものと考えられる。

この変化は単に環境の変化だけでなく、あらゆる分野の価値観に影響を及ぼすであろう。これからの企業経営は単に経営に関するテクノロジーだけでなく、幅広いナッジと深淵なウィズダムがすべての判断と洞察の根底になれば乗り切れない。

たとえば、経営の品質、ベスト・プラクティス、ベンチマーキング等々の考え方にしてもその源泉は人間のもつナレッジの現われである。20世紀の機械文明は機械を使いこなすソフトウェアの開発へと進んだが、21世紀はナレッジを基準として新しい価値観を創造しなければならない。したがってその開発に当たっては理念、哲学が要請される時代になるであろう。

このナレッジは単に企業経営の分野にとどまらず、あらゆる社会現象、たとえば地球の環境保全、製造物責任、人口の増大、高齢化、ヘルスケア、白然災害、その他への対応についても必要である。しかし、このような諸条件のもとでナレッジを基準にした管理のあり方や力法論についての体系的な研究は少ない。人間のナレッジをいかに有効に役立てていくかについて理論体系を確立、その体系について世界各国との交流を深めてゆくことが21世紀における大きな課題である。

このような時代の変化とニーズの変化に対応するため、ここに新しく日本ナレッジ・マネジメント学会を設け、7:するものである。広い視野で科学的に研究するため、単に学界だけでなく、産業界、官界などと協同で研究を推進し、その研究成果を積極的に広く公開し、社会に貢献させていきたいと考えている。



セミナーレポート

GLOBAL LEADERS FORUM

去る4月2日、富士ゼロックス株の主催でGLOBAL LEADERS FORUMが帝国ホテルで開催されました。出席者は約430人で盛会でした。テーマは『グローバル化と知識企業』で、午前中のセッションは「グローバル化と経営ビジョン」午後のセッションは「知識経営のベスト・プラクティス」でした。それぞれのセッションのスピーカーは以下の方々でした。

午前の部

グローバル化と経営ビジョン
オープニングスピーチ
富士ゼロックス株式会社代表取締役会長
小林陽太郎

キーノートアドレス
米国アスペン研究所理事長チャールズ・B・ナップ
モデレーター
モディコープ会長 プロペンドラ・K・モディ
北陸先端科学技術大学院教授 野中郁次郎

午後の部

知 握のベスト・プラクティス
キーノートアドレス
スウェィザーナレッジマネジメント代表
カール・E・スウェィザー
モデレーター
一橋大学教授竹内弘高
イーザイ株式会社代表取締役社長 内藤晴夫
世界銀行プログラムディレクター
ステーブン・デニング
米国生産性品質センター社長 カーラ・オデール
クロージングリマーク
富士ゼロックス株式会社代表取締役副会長
宮原 明

それぞれ、ナレッジ・マネジメントについての興味のあるスピーチがありましたが、米国生産性品質センター(APQC)のカーラ・オデールさんのプレゼンテーションについて若干取上げてみます。

オデールさんのプレゼンテーションによると、アメリカのプラクティスは、次のように変化してきたと述べていました。つまり、ナレッジ・マネジメントはすでに1995年に始まり今Hに事っているということです。

1995 Knowledge
1994 Transfer of Best practice
1991 Bench Marking or Best practice
1983 System Quality or Process Improvement
1977 Competitiveness: productivity & Quality

日本においても、ベンチマーキングやベストプラクティスは常識的なビジネスのアプローチですが、これからナレッジ・マネジメントの段階へ急速に傾斜していくとの感想をもちました。

APQCではナレッジ・マネジメントは1993年以来注目し、1997年にはナレッジとその学問の組織について、100以上の企業について一緒に研究してきているとのことでした。

V.S.においては、CEO、CFOと同じランクでCKOつまりChief Knowledge officerが生まれています。ナレッジ・マネジメントが企業の中に定着しつつあることを感じます。

(M.M.)

KM関連図書 の ご案内

1. デジタルチルドレン ドン・タプスコット著ソフトバンク(98/3)
北米で8歳～13歳位のグローイング・アップ・デジタルとよばれる子供達が、インターネットで情報交換し大変な知識量を持つ。彼らの実態調査とその将来を考える。
2. Working Knowledge [:欄耀"H Press(98/1)
カテゴリー別に分けた企業6社のKM事例(全体では40社)をひきながら「What are the best Ways to incorporate technology into knowledge work」を概説。
3. 知識資産の経営 紺野登著日本経済新聞社(98/1)
大競争時代のキーワードは技術・ノウハウ・ブランドなど(知識資産)の創造的活用であるとの前提で、米国企業も含めて経営の在り方を創造的に再構築している
4. ハーバード・ビジネス・レビュー 98年1月号 ダイヤモンド社(98/1)
知識をイノベーションの源泉とする未来企業の条件とし、ドラッカーをはじめとして18に及ぶ論文・報告などが集められ、イノベーション組織とKMの未来をみせる。
一歩
5. マルチメディア社会の知識ビジネス S.デイビス他著産能大学出版社(97/8)
膨大む利益を産む知識ビジネスの到来を的確に予測し、情報技術を武器に教育分野も含めて、企業が知識ビジネスの覇権を握るプロセスの実証と知識企業の実態を明示。
6. 考える組織の経営戦略 R.オーブレイ他著PHP研究所(96/10)
新しい経済は知識に基づいた価値の構築に依存する。全ての組織を学習組織に転換させ、効果的な学習プロセスの5つのモデルの構築へと進んでいく。
7. デジタル・エコノミー ドン・タプスコット著野村総合研究所(96/7)
進展するデジタルエコノミーのもとで企業は市場における役割、事業の構成、利益、スキームなど企業、個人、行政がとるべき行動フレームとビジネスモデルを提示。
8. 知的創造企業 野中郁次郎・竹内弘高著東洋経済新報社(96/3)
米国版の逆上陸した翻訳本。米国で絶賛された日本企業における組織的知識創造を具体的企業名をあげながら、事実を理論的に解明することで日本的知識創造を解明。
9. 最強組織の法則 ピーター・センゲ著徳間書店(95/6)
センゲはMITの教授で全米ベストセラーとなった本。次の5つの法則を説く。
System Thinking, Personal Mastery, Mental Models, Shared Vision, Team Learning.
10. 知力経営 紺野登・野中郁次郎著日本経済新聞社(95/1)
今後の企業には組織の知的能力とそれにより創造される知識が不可欠であり、知力は組織の作られ方で決定される。人の背後にある知識とダイナミズムに着眼する。

役員

会長	奈良彌久	(株)三菱総合研究所取締役会長)
副会長	大野剛義	(株)さくら総合研究所取締役社長)
副会長	花村邦昭	(株)日本総合研究所取締役社長)
評議員会議長	亀井正夫	(住友電量工業(株)相談役)
理事長	森田松太郎	(朝日監査法人相談役)
副理事長	嶋口充輝	(慶應義塾大学教授)
専務理事	高梨智弘	(株)日本総合研究所理事)
専務理事	山内悦嗣	(アーサーアンダーセン日本副代表)
専務理事	一條和生	(一橋大学助教授)

評議員

唐津一	(東海大学開発技術研究所教授)
河村有弘	(日経BP(株)専務取締役)
トム・ケリー	(Knowledge Enterprise理事長)
坂本吉弘	(東京三菱銀行顧問)
椎名武雄(日本アイ・ピー・エム(株)会長)
*杉之尾孝生	(防衛大学教授)
瀬戸雄三	(アサヒビール(株)社長)
竹中平蔵	(慶應義塾大学総合政策学部教授)
田中 榮	(株)大和総研社長)
張富士夫	(トヨタ自動車(株)専務取締役)
野中郁次郎	(北陸先端科学技術大学院教授)
橋本綱夫	(ソニー(株)副会長)
浜田広	(株)リコー会長)
カール・ベッカー	(京都大学総合人間学部助教授)
S・ホロニック	(アーサーアンダーセンパートナー)
本間雅雄	(株)情報通信総合研究所社長)
松本滋夫	(日本電気(株)常務取締役)
峯嶋利之	(日本電信電話(株)常務取締役)
宮原 明	(富士ゼロックス(株)副会長)
師岡孝次	(東海大学工学部教授)
山本信孝	(株)三和総合研究所社長)

理事

阿片公夫	(株)NEC総研社長)
生田哲郎	(生田・名越法律特許事務所弁護士)
石崎忠司	(中央大学商学部教授)
伊藤進一郎	(住友電気工業(株)専務取締役)
上野守生	(亜細亜証券印刷(株)社長)
内田和也	(ボストン・コンサルティング・グループ創社長)
大久保寛司	(日本アイ・ピー・エム(株)MQD推進担当)
岡本正秋	(株)MPC代表取締役)
尾原重男	(株)三菱総合研究所常務取締役)
加護野忠男	(神戸大学経営学部教授)
木川田一榮	(富士ゼロックス(株)知識デザイン開発担当部長)
国領二郎	(慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授)
酒井 清	(株)リコー取締役)
住田笛雄	(センチュリー監査法人代表社員)
高橋 均	(株)NTTメディアスコープ代表取締役社長)
田坂広志	(株)日本総合研究所取締役)
谷口恒明	(働社会経済生産性本部産業経済開発本部本部長)
徳谷昌勇	(成蹊大学経済学部教授)
福沢 進	(日本電信電話(株)理事・経理部長)
村田守弘	(ベッカー・マッケンジーパートナー)
矢澤洋一	(日本経済新聞社事業局総務)
山田英夫	(早稲田大学アジア太平洋研究センター教授)

監事

浅野純次	(株)東洋経済新報社代表取締役社長)
富尾一郎	(朝日監査法人会長)

* 次回の理事会で就任予定 / 氏名は五十音順

新会員を募集しています

当学会は、ナレッジ・マネジメントに興味を持ち、研究意欲を有する人であれば、とくに入会資格を制限していません。学会の活動にご参加いただける方がいらっしゃれば、ぜひ参加を呼びかけてください。申し込みに必要な書類一式は、当学会事務局に用意していますので、必要に応じてご請求ください。

お申込み方法

「入会申込書」に必要事項をご記入のうえ、下記の当学会事務局宛てにお送りください。なお、法人は年会費100,000円(入会金なし)、個人は入会金5,000円、年会費5,000円を下記の銀行・郵便振替口座へお振り込みください。

申込喜送付先:日本ナレッジ・マネジメント学会

〒103-0022東京都中央区日本橋室町3-1-IO田中ビル(株)日本ビジネスソリューション内

TEL03-3270-0020FAX03-3270-0056

年会費振込先:

銀行口座口座人名:日本ナレッジ・マネジメント学会理事長森田松太郎

さくら銀行日本橋営業部普通7072689

住友銀行日本橋支店普通1085878

三和銀行室町支店普通3884012

東京三菱銀行東京営業部普通3412822

郵便口座口座人名:日本ナレッジ・マネジメント学会

日本橋三井ビル内郵便局00120-3-12323

年次大会の開催について

理事会において、当年度の年次大会は1998年9月21日(月)に株さくら総合研究所で開催することが決定しております。万障お繰り合わせのうえ、ぜひともご参加ください。

研究会、部会の開催について

理事会において、つぎの研究会および部会を設置することが決定しています。詳細が決まりしだいご案内いたします。

会費未納会員にお願い

未納の個人会員は、上記のいずれかの銀行口座あるいは郵便振替口座に振り込みをお願いします。



あとがき

発足会から1か月を経過し、研究会の開催、年次大会の計画など当学会もいよいよ本格的に活動を開始しています。活動の一環であり会員のみなさんへの連絡を行うための会員だより第1号ができあがりましてのでお届けいたします。行き届かない点が多々あると思いますが何分よろしくご指導、ご協力をお願い致します。

会亘、講氏のご健勝を心からお祈り申し上げます。

石崎、川局、古山

発行日/平成10年5月1日

発行者/日本ナレッジ・マネジメント学会

編集人/石崎忠司

制作/第三出版(株)

個人会員83名、法人会員32社(平成10年4月2日現在)

日本ナレッジ・マネジメント学会事務局

〒103-0022東京都中央区日本橋室町3-1-IO田中ビル (株)日本ビジネスソリューション内

TEL08-8270-0020 FAX03-3270-0056